

作成: 芝崎

43. サラリーマン時代の思い出篇: 白馬岳(しろうまだけ)の山登り

入社 2 年目の 7 月に同期の仲間(6 人)と白馬岳(標高 2,932 m)挑戦。上りは砂利道/沢から雪渓(4 K)、お花畑と天気よく、ちょっときつかったが、とても気持ちよく山登りできた。時間的に暗くなり、頂上の約 100m 手前でキャンプ。それからが暗転!! 朝 5 時頃、なんか気になり、頭をさわると、濡れていた。少しずつ雨が降っていたのに気が付く。斜面にテントを張り斜面の上側に頭をおいて寝ていた為、斜面に沿って傘が流れ落ちて、髪の毛が濡れた。すぐ飛び起きて、すぐ下山の支度をした。ただ、登山経験者がいなく、皆同レベル。登ってきた道に戻るか、頂上を經由して尾根づたいを歩いて下山するか、皆で協議、早く下山できそうな、尾根づたい歩く方を選択。無事下山でき、その日ホテルに宿泊し、朝刊を見て驚愕。我々より、1H 早く尾根づたいに下山した 2 人組の 1 人が雷に(まさに白馬の世界から豹/狼の世界に)当たって亡くなった記事であり、頭がホワイトに。我々も同様なリスクがあり、登ってきた道に戻るべきだった。「九死《九分》に一生《一分》を得た: 我々六人は六死(六分)に一生(一分)を得たが、本当に「三分」は運がよかったかもと。安全な転回できず!! 反省&教訓が残る山登りあった。

笑いのポイント(笑点)

しろ: 白(しろ)いひたすら昇り道(約4K)の雪渓を乗り越えて

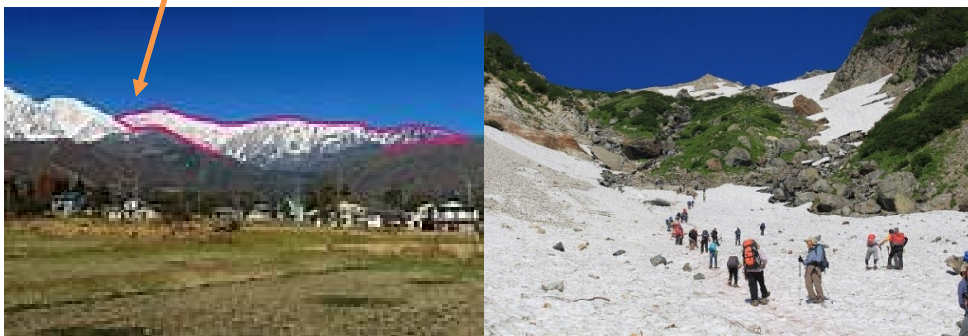
う: (う)れしいお花畑の出迎え

ま: 満(ま)足感のある一日であり、白馬がどこかで現れる期待も。

だけ: (だけ)ど、翌日は強烈な傘と雷(雷)の攻撃、一夜にして急変:「山の怖さ」を知った瞬間であった。

白馬の頭部

約4Kの雪の道《意外と辛い》



名前の由来は春に現れる雪形「代(しろ)搔(かき)馬」 この「代(しろ)馬(うま)」が転じて「白馬」になった。

白馬岳を頭部と見立てると、青空を走る白馬の姿が見えてくる。

・東山魁夷の作品(白馬)に魅せられたことで白馬岳に登るきっかけになる。



今回の唯一の教訓: 雨天になった場合は尾根づたいを歩かない事

以上